

第4回 北陸新幹線加賀温泉駅駅舎デザインコンセプト検討委員会

日時 平成28年3月25日(金) 14時~16時

場所 加賀市役所別館 304会議室

1. 事務局説明

(事務局) 委員会を始めさせていただきます。本日、第4回北陸新幹線加賀温泉駅駅舎デザインコンセプト検討委員会ということですね。本日は3月末という、皆さま大変お忙し中、お時間をお作りいただきまして、有難うございました。本日、残念ながら、高山委員、それから、丸谷委員におかれましては、ご都合が悪いということで、ご出席いただきませんでした。また、竹内委員の方は、代理ということで西出様に、今日代わりにいらしてもらっております。それから、県の方からは、高橋様が代理ということで来ていただいております。有難うございます。

それでは本日、平成27年度の最終委員会になりますけれども、過去3回の委員会の検討を踏まえまして、駅舎のデザインコンセプト案につきましてご検討いただきたいと思っております。宜しくお願いいたします。

それでは、早速始めさせていただきますので、水野委員長、よろしくお祈りいたします。

(水野委員長) それでは、早速始めたいと思っておりますが、北陸新幹線開通から1年になりまして、わたくし金沢駅1周年記念のイベントと、上越妙高駅の1周年記念イベントと両方に参加してまいりましたけど、いずれも大変な人出で、1周年を祝っておりました。JRの方から伺っていますように、乗降客が増えたというだけではなくて、地域の人たちが1周年を祝いに駅に集まってきているという、こんな状況でございます。金沢駅もちらほらいっぱいの人たちが来ていましたし。上越妙高駅では、駅、自由通路、それから駅前広場、駅周辺施設に人がいっぱい。こんな人が出てくるのは初めてだと思うほど。先生もいっていましたが、開館で記念の討論会があったのですが、市民の応募者を募ると定員の26倍の応募がきたそうです。それほど関心が高くて、すごいなと思ってですね。

それも各駅とも10年20年、構想を積み重ねてきておりました、それが実っているというのが出ております。そんな意味も含めて、まだ加賀温泉駅の時間はありますので、是非、成果が上がるように皆で考えていきたいと思っております。

今日は、今年度最後の会でございますので、今までは少し、位置付けに戻ったり、コンセプトに戻ったり、色々しながら右往左往してまいりましたが、今回は少しリアリティあるところで着地させたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは早速、議事次第に従いまして、第3回検討委員会の意見整理と今後の対応について、説明をお願いします。

(コンサル) 資料の確認ですが、資料1としたものは、本来、今回議題になっているものでございまして、資料2というのは参考資料でございます。乗降客数についての推計の変更をおこなっております。それを含めまして説明させていただき、資料にもどっていただいて、議論をしていただくように思います。

(水野委員長) ありがとうございます。ただいま、資料1の1頁から19頁までをパワーポイントと一緒にご説明いただいたんですが、何かご質問ございませんか。

(村治ワザバー) 確認だけさせていただきたいんですけども、資料の19頁、左下の断面図の説明のなかで、駅のコンコースの設計について共同の記載があつて、資料にはないんですけども、今までの話の進め方としては、今回の提案をいただいて、外観の施工図、今の予定ですと29年度の終わりには3つほど、キーワードにあつた案を提出させていただくんですけども。

中のコンコースについては、今までの機構が主に中の設計をしておりますので、共同というところまではいかないのかなと。今までの説明に色々あつた、地場産の地域材料とか色々あるんでしょうけど、その辺のものをどう取り入れるとかがつていうのもあるんでしょうけど。

基本的には、機構でデザインといいますか、コントロールをしたいという風に考えておりますので、その辺の認識を確認したいなというところでございます。

(コンサル) 共同という表現が適切かどうかは別として。

(村治ワザバー) そうですね。

(事務局) 市の意見として、また機構さんの方に挙げていきたいと思っております。

(村治ワザバー) 全然ないとそういう意味では全然なくて、まずはうちの方でコントロールしたい。というのも中はですね、テラスなど色々な運用面での機能というところも抑えますので、それを加味して、デザインも含めて機構の方で検討したいということでございます。

(水野委員長) 共同の度合いが色々あつて、テナントだったり、棚場だったりする場合がありますし、自由通路に対してどれだけ投資するかという問題がありましようしね。観光案内所とか、それから売店とか、そんなものも行政側から投資したいという場合もありますしね。

(村治ワザバー) 都市施設については完全に加賀市さんの、コントロールの中にはいるのかなと思っておりますけど。

(四十九ワザバー) こっちも確認していいですか。先ほどからたくさん、南北自由通路という言葉が出てくるんですけども、あれは今抜いているあそこを通られるんですか。そこですよね。

(水野委員長) はい。

(四十九ワザバー) その中の、南北自由通路という言葉ではないですよ。コンコースの。自由通路はあくまでもいっておられるのは、いまある、あそこへ通られるんですよ。だったら構わないんですけど。

(水野委員長) 南北間を結び通る。

(四十九ワザバー) 今出来ているやつを改修する。

(水野委員長) 在来線の下を通っている。

(四十九ワザバー) はい。わかりました。

(水野委員長) それと駅前広場のコンコースをどう使いわけるかという話が残るんですけどね。

(水野委員長) わたしから質問なんですけど、この場合に都市施設っていうのはどう

いうものを具体的に指していますか。今でいうと、昼間がらみの都市施設と出ていましたね。

(コンサル) 資料の12頁の右上の方に、具体的に例えばという形で書いてございますが、あくまでも今の段階で、分かっている範囲でのご提案なのですか。必要と考えるものについては、ここで点線で書いてあるまとめたものでございまして。他の駅にみられるのは、観光案内所、飲食、観光物産、伝統工芸の展示、そういったスペース、待合所、トイレです。それらを指します。

加賀温泉駅については、JRの施設で入ってくるのは、これらの施設ではないかと内々の話で情報をいただいている中で、例えば、駅舎内にトイレぐらいは設置出来ないかなということで、トイレを駅舎内に設置して、それ以外のものを都市施設として他の高架下以外の部分で何か出来ないかなというイメージで描いております。

(水野委員長) JRさんにご意見聞きたいんですけど。ほとんどの駅はコンコースがある、そういうような都市施設が入っているんですね。観光案内所とか物産の販売店とか。

(四十九ワザバー) はい。

(水野委員長) で、先ほどの断面図で、駅前広場だけにあるわけじゃないですよね。ほとんどの駅。金沢駅も富山駅も高岡駅も上越妙高駅も糸魚川駅みんなそうですね。ここに都市施設があるわけじゃなくて、都市施設というのは、この中にもあるということです。

(四十九ワザバー) 場所、場所によって違うんですけども。金沢駅の場合は元々、新幹線の高架下部分は、県さんの持ち物。

(水野委員長) 作っていますよね。

(四十九ワザバー) 元々、県さんの所有地であり、県さんのものなんですけども。高岡駅になると、結局、我々が機構さんからお借りして、それを高岡市さんなり、民間にお貸しするっていうことなんです。いろいろあるんですけども。

観光案内所につきましては、我々が必要とあればですね、その近辺にとれなくても、ある程度の面積はお貸しするっていうことも可能ですね。

(水野委員長) ただ、お客さんの方からいうと、コンコースに色んなものがあるのが一番便利なんですよ。それから外れてであると、そこへ行く利用率がちょっと下がっちゃうんですよ。だから、コンコースに出来るだけ接してっていうのが原則だと思うんですね。

いわゆる、上越妙高駅なんかで言っている都市施設っていうのは、昇降口とか、駅前広場の一部の広場だったりしているんですね。交通広場も含めてですけど。都市施設って言い方のときに、本当の駅に付随していきやいけない部分っていうのと、この駅だから独特にでちゃう部分、2つあると思うんですね。

先ほどトイレの話ですが、トイレなんていうのも、JRさんが完全に整備していただけるものと考えて。

(四十九ワザバー) ラッチ内はそうですね。基本的にラッチ内は当社で。

(水野委員長) だいたい考えますよね。それと待合室とかね。

(四十九ワザバー) だいたい待合室はラッチ内ですね。

(コンサル) 基本的には今、水野先生がおっしゃっていた通り、駅コンコースに接する形で何かできないかという事で、提案なんですけれども。高架下にも、入らない理由があるのであれば駅前広場を、都市計画決定の変更が必要になりますけれども、区域から外した

形でやっていく方法もあるということですね。

(高橋委員) 確認なんですけれども、資料 12,14,15 頁なんですけれども。例えば、14 頁の絵ってというのは、A案を基にして描いた場合の案として 14 頁の様になるのでしょうか。という風に考えてよろしいでしょうか。

(コンサル) 都市施設の案としてですか。

(高橋委員) そうです。

(コンサル) それはB案です。

(高橋委員) B案なんですか。

(コンサル) 一番思い切った案で描くところになります。

(高橋委員) なるほど。じゃあ、大屋根の大きさっていうと高さは 13.5mと出ているが、幅はどんなものぐらいですか。だいたい。

(コンサル) 実際は 15mほどなんですけど。この絵でいうと現在の幅で 12mで描いてはおります。

(高橋委員) 15mですか。ほしたら、12 頁の新幹線の景観のところ、エレベーションで 16.95 となっていますけど、普通の新幹線のより高い高さだご説明があったかなと思うのですが、普通はこんなに高くないのでしょうか。

(コンサル) 若干です。どの駅と比べるかによりますけど。

(高橋委員) こんなものになるんですか。

(コンサル) こんなものですね。16.95 っていうのは。

(高橋委員) 特に目立って高いというわけではないのですね。逆に他の駅から高いいうのであれば、いろんな眺望の話がありましたけども、逆に高さを活かして、眺望を少し活かせるというのものもあるのかなと思ったんですけど。そんな別に目立った高さでもないっていう事ですね。そうですか。分かりました。

(師池委員) 話が外れて申し訳ないんですけど、駅北口広場の方の駅舎っていうのを、こちらの駅舎の方の中っていうのは、どのような風にお考えですか。

(四十九ワザバー) 並行在来線会社です。

(師池委員) 並行在来線会社なんです。ほしたら、そこに売店とかつくとかっていう話とかは、ある程度分からないのでしょうか。

(四十九ワザバー) 並行在来線会社が必要とあれば作るでしょうし、必要ないとあれば作らないでしょうし。そこはちょっと我々が作る、作らないとか分からないですね。

(師池委員) 分かりました。ありがとうございます。

(水野委員長) 確認なんです。今度の新幹線のホームが出来て、新幹線のコンコースが出来た場合に、階段とかエレベーターとか、高架の範囲内で全部整備されるんですかね。

(四十九オプザバー) そうですね。

(水野委員長) そうですね。実は、資料 12 頁の下のロープウェイなんかは、乗降施設を外に外しているんですよ。中 2 階レベルに自由通路を作っているんですね。

(四十九ワザバー) はい。

(水野委員長) ですから、資料 12 頁の白い所みたいなやつは、その空間にあるんですね。それは上越妙高駅の方から申し込んで、この中で降ろさないで、ここで降ろすようにして、それを市が出しますよっていう提案なんです。それで動いたんです。

どこに自由通路をつくるかっていうのは、今の在来線と共に、これをどう繋げるかっていうのはものすごく大事な話になってくるんですね。そのところに接して、観光案内所とか何かを作るんですけども。上越妙高駅は観光案内所や売店や食堂をこの中に作っているんですね。中2階のレベルに。

(四十九ワザバー) そうですね。

(水野委員長) 都市施設として作っとるんですね。で、高岡駅もそうです。黒部駅はここへ作ったんですね。外に出したんですね。観光案内所とか。だから、そういう出し方の問題があるんで、それはJRさんと協議しながら、どれだけ余裕があるかっていう問題が残るんですね。で、その設計まで出来てないので、結論は出ないんですね。ここでは。

ただ、どうやるかっていうのは、上越妙高駅型でいくのか、高岡駅型でいくのか、黒部駅型でいくのか、かなり早い段階で決めないといけないですね。

(四十九ワザバー) 一点分かっていることはですね、先生もいっておられた、上越妙高駅の場合ですと、コンコースが2階っていうんでしょうか、いわゆる二層になっていて、ホームがその上を通っている。今回の加賀温泉駅の場合ですと、コンコースが1階になります。で、2階がこの絵の通りホームになるわけなんですけど。1階はコンコースですけど、駅前広場に段差がなくてそのままいけるっという。そういうことです。

(水野委員長) そういうことですね。上越妙高駅の場合は、在来線が地上に走っていて、そこを切る訳にはいかないんで、中2階に。

(四十九ワザバー) はい、そういった条件も色々ございます。

(水野委員長) 今度の場合は、ちょっと中2階のところに在来線があるっていう。そういう特殊条件があるので、その下に自由通路ができる。それから発生してくるっていう事ですよ。以上です。それで、このデザインコンセプト委員会としては、将来、先ほど次年度、平成28年度以降っていいましたけども。

この駅舎そのものとか、それから、駅の下の自由通路とか、駅前広場、コンコースとか、そういったものに対してどういうお願いなり、何なり、地域性を出していただくか、という問題の議案がひとつあるということですね。もうひとつは比較的自由なのが、ここは加賀市が自由に設定してやりましょうよっというのはあるんですね。ですから、その時に全体して統一したコンセプトをどういう風に示していくのか。テーマをどうしましょうかってなってくるんです。

で、もう少し解説しますと、糸魚川駅があるんですけども。糸魚川駅はどういうコンセプトを出したかというのと、あそこはフォッサマグナだったりですね、日本の中央線でぶった切っている破碎帯。破碎帯イメージだったので、外観にこの破碎帯をバーアッと入れたんですね。そういうの提案したら、JRさんも運輸機構さんもそういうのやって。あれ破碎帯みたいなイメージでやりましたよね。外観はね。そういうイメージだったと。

高岡駅は、瑞龍寺とか色々あるので、古い木造のあれでいきたいっというので出したらそういうのでなりました。

金沢駅は、もてなしドームとか、色々あって、屋根が曲線で出来ているというのと、在来線のホームとくっついているので、真っ暗になっちゃうと。というので屋根をウェーブであげて、光を採り入れて欲しいっという案を出して、それを採用したと。

それぞれ色んな事情があって、色んな形を出しているんです。先ほど上越妙高駅では、

桜が非常に有名で、桜祭りなので、桜の花びらをいっぱいガラスにやって欲しいっていう要望を出して。それから、山が見えるんですけど、山が見えて欲しいっていうのを。

そういう事で、JRさん側にこここのところはどんな風にして欲しいっていうのはあるのかと思います。これをどうして欲しいとか、ここは自分たちでどうしたいって。そういう区別があるんですけども、そのことも含めて、今日コンセプトを定めていきたいって事です。

基本的にJRさんなり、運輸機構さんとしては、どの新幹線の駅も差別すること無く、平等でいきたい訳ですよ。差をつけちゃいけない、そりゃ当然だと思いますよね。ここにこういう風にして、ここはこういうことにしてって。だから後は、各地域との関係でどういうのが出てくるかっていう。その地域の力が出てくる訳ですよ。その地域の力をどう出そうかって、そういう段階です。

で、もう少し言うと、ほとんどの新幹線の駅は、多分、白からグレー系で、ずうーっといくと思います。だから新幹線が止まったときに、車窓から少し、そのホームの窓を透して、町の景色が見えるように。窓がずうーっと付くと思います。それは一般解であって、で、なにもしなければそのまま出来ると思います。320mで、高さ8mで、幅40mのでっかい箱が出来ると思います。その下のコンコースも普通の駅になると思います。

で、もうひとつは、資料の2頁見ていただくと、左側になるんですが。毎回言っていますけど、この黄色い線の範囲で考えているっていうふうな訳でございます。この黄色い線の範囲では、駐車場が足りないとか、加賀市はどう行きたいんだっていう、駅前整備は何もないじゃないとか、そういう議論は散々してまいりましたので、それについてはもう、議論ははっきりしたので。今回は黄色い線の中をどういうコンセプトで仕上げるかということを出していただいて。それは、後ずっとその赤い丸を含めて、広がっていく事を期待するという風になろうかと思えます。そんな風に解釈してよろしいでしょうか。

それで出てきましたのが、資料17頁の右下にあるんですよ。デザインコンセプト案について、いかがでございましょうか。これが委員会の一番大事なところ。

(古場田委員) 文書で書くとこういう形になって、非常にこれはこれで見分かると思うんですけども。いろんなイメージ資産があるので、その中で何を大事にするのかっていうところでもありますけど。何でも散りばめればいいというのではなくて、例えば工芸であったり、食であったり、色んなものがありますけど、風景であったり。

私が考えますと、例えば、加賀市で日本全体に対して、世界に対して、一番誇れるもの、自慢できるものは何かっていうのを考えると。それは文句なく古九谷。世界で通用するのは古九谷だけだと思いますよ。

伝統工芸同士で比べると、山中漆器があるじゃないかといいますけど、北海道以外に、日本全部の地域に、漆器の産地がございます。で、イメージが何か特化してるとか、そういうのでも無いので。そうなる、それは古九谷のイメージを中心にして、あとはサブ的に排出するっていうのがあるのかなと。

で、今A案・B案という風に出されていますけども。どちらも割と平均的なところで、機能優先でつくると、どちらかの案があると思うんですけど。もっとシンボリックなものであっていいのかもしれないですね。

特に、その駅舎の離れたところのいわゆる構築物ですね。例えばですね、ちょっとイメ

ージ通りに伝わるかどうか分かんないですけど。中央アジアとかにあるイナレットってご存知でしょうか。ああいう感じで、例えば、古九谷風のタイルと千代紙みたいな、パールを作ったりとか。そういうシンボリックなものというのも可能性があると思うんですね。おそらく、焼き物を切り口にした駅というのはどこにもないと思うんですね。

それで、そういったものを中心にしてコンコースとか、ホームとか、地元産の色んなタイルを散りばめたる。もちろんその、千本格子みたいなものもありますけど、それはどこの地域でも成り立つんで、そんなものだけだとちょっとつまらないかなと思うんですね。そういった可能性が一つあるのではないかなという風に思います。

さらに長期的、もうちょっと長い目で見た場合に、100年後とか、200年後に、それが何か遺産になっていけるようなものであるという考え方もあると思うんですね。今の考え方でいくと、おそらく、非常に消耗品的な建築物になると思いますけれども。今世に残るかどうかも考えていただいていた方がいいと思います。

さらに、例えば焼き物を作るっていうことになれば、地場産業の仕事、必ず補修パーツが発生するんで、そういったところの、産業振興のベースになるっていう風なことも考えられるかと思えます。

(水野委員長) 古九谷って言えば、独特すぎるくらい、独特で。個性が強いですよね。

(古場田委員) この中にちょっと補足しますと、九谷五彩とかそういう風にして書いてありますけども、古九谷になるとですね、三彩なんですよね。五つもぶつかっちゃだめなんですよね。そういったところも、色とか素材のおさえ方っていうのも、非常に大事になってくるのかと思います。

(水野委員長) 焼き物っていう中では、完璧な色合いの、分類だし。色合いの中でも、特殊な、隅々まで全部塗りつぶすっていう、そういう色合いだし。色の種類も、非常に強い色ですね。そうすると、普通、新幹線では320mは真っ白だと思うんですけど、それと古九谷って比べたら、どうもっていくのかっていうのが、それが勝負ですね。

(古場田委員) そうなんです。アレンジが非常に難しいと思うんです。成功すると、特徴がある、個性的な、強い主張がある駅になると思います。

(水野委員長) 例えばですよ、床を、ほとんどの新幹線の駅はグレー系か茶系なんですよ。これを古九谷の緑でパーッといっちゃうとかね、そうするとゴローンと変わるんですよ。

(古場田委員) ただその、系統に分けて三彩を上手く使って、どちらにするかとかですね。

(水野委員長) もちろん、ホームの差とか、いろいろ出しながら。ただ、そういう事とか、何かパァともっていく事はできると思うんですよ。だから、どっかで古九谷っていったときに、古九谷を建築空間なり、駅空間なり、翻訳するときに、どう翻訳していくかですね。それが大事なデザインになるわけですから。コンセプトとしては、古九谷っていうのは、有りですね。

それから、駅前広場をどうするのかっていうのもあるだろうし。金沢駅みたいにコンコースに対して少し投資したっていうときに、コンコースのデザインに対して色々提案することもあるでしょうね。ほとんどの、要するに長野駅の飯山もそうですけど、地元産みたいな杉でだいたいやっていますよね、コンコース関係はね。杉で推してるんで、杉の変わりにこっちは九谷で推すとかね、そういう方法もあるということですね。その場合、市の方もあるいは、石川県の方も、投資するっていう覚悟がないと、JRさんも運輸機構

さんにもおんぶしてもらう訳にはいかないのです。それも非常に、だから、こちらの力がいきますよね。

あともうひとつつわたくしは、ここの駅を乗り降りする人たちは、ビジネスマンとかサラリーマンとか、非常に少なく、もっとここへ来て、楽しみに来たとか、あーまた家に帰るのかとか、何かそういう、入る時と出る時の差が非常にあって、非常におもしろい駅なので、何かそういう、少し駅がドラマっぽくていいのかなと、日常っぽくなくて。物語があるっていうんですかね。

(古場田委員)何かもうちょっと、芸術的な空間であっていいかなっていう気がしますよね。

(水野委員長)温泉街から来るときに、ほっとする気持ちと、一方で何か華やかな、かぶくって感じの。楽しい雰囲気っていうんですかね。映画をみる前の気持ち、あるいは劇場に行く前の気持ち、あるいは大相撲を見る前の気持ち、そういう様な興奮みたいなありますね、そんなのはどうですか。エンターテインメントに対する。だからそういう、古九谷とか何となく、そういう華やかなってのもあってもいいかなって。ほとんどの駅、非常にクールなんですよね。ビジネスマンとか、交通って感じで行っていますよね。何となく、安らぎのほっとする気持ちのあるっていうのと。華やかな、何か凄いものありそうだなって気持ちにさせる。

そういう意味でいうと、資料の「加賀の自然と歴史が育んだ地域力を見せる駅」の下に4つの副題がついていますけど、4つの副題を、これ同じようなこと繰り返しているから、もっと違う表現がありそうですね。ほっとする安らぎみたいなものもあるし、期待される粋な華やぎが、華やかさが欲しいとか、があるとね。そういう風なのにしてね。それが、コンセプトにはあるということですね。

あともうひとつ、コンセプトになりそうだなと思ったのは、ガーデンシティをいっていますよね。ガーデンって意味が、非常に面白いと思いますね。

ガウディがグエル公園ですね、あれは焼き物を散りばめている。下の部分は、焼き物が入っていて、上へ行くと、焼き物のイスとベンチと塀がバーアとあって、何となく、見える塔もみんな焼き物で出来ているっていう。あれは、焼き物がテーマなんですよね。

(古場田委員)実は、先週行ってきたんですけど。

(水野委員長)ああ、そうですか。

(古場田委員)あともうひとつ、ガーデンシティって考え方なんですけど、まあ同じ様な地域なんですけど、マドリッドにアトーチャ駅ってございますね。ご存じだと思いますけれども。あれは非常に大きな空間なんですけども、大きな屋根にかけて、真ん中に熱帯植物園がある、そんなイメージと想像いただければと思いますけども。あれはグーツと背の低い和風庭園があるような、ああいう空間があるのかなと思えばと。

(水野委員長)そうですね。駅前広場はこういうものだという常識と、ちょっと外してもいい様な、加賀温泉駅じゃないかっていうテーマができるね。

(古場田委員)アトーチャ駅って駅らしくないんですよ。なんか違う空間に来たなっていう感じなんで。そういう何か驚きみたいなものが持たせれるって、観光客にとっては、とても大切なことだなと思いますけど。

(水野委員長)金沢駅は世界の中で選ばれている理由は、それはですね。駅前には別に、だ

いたい交通空間なんです。世界中同じ駅なんですけど、決まっているんですけど。そうじゃなくて、駅前広場を見たら、何か広場があって、それに屋根が出てたってこれはびっくりだなんていうのがまずあるんですね。どうですかね、長谷川先生。

(長谷川委員) 金沢駅みたいに大きくないですよ。

(水野委員長) そうですね。

(長谷川委員) どう見たって、コンパクトな小さな駅で。小さな駅がどう発展するのかっていうと、広げすぎたらだめなんやね。だから、素人の方はものすごくいい。古九谷のところに持っていくなんてさすがだと思うんですけども。もうひとつ、その山中の木製漆器、これは日本ではナンバーワンなんです。挽物はね。

(水野委員長) 挽物でね。

(長谷川委員) そこの兼ね合い。まったく九谷だけでいいのかどうかっていうのもね。

(水野委員長) いや、勿論そうですね。

(長谷川委員) そこがちょっと難しいと思って、両方やっぱり考案して。挽物にとっては、本当いうと我々は強いんだわ。

(水野委員長) そうですね。

(長谷川委員) それをただ遠慮しとるだけなんで。もっと前に出していかないと思いますよ。

(古場田委員) 山中漆器っていうと、大きく捉えるんでなくて、木製の挽物、木工芸の世界として捉えて。それから、色んなディテールで使っていけばいいと思いますよ。

焼き物に比べて耐用年数とか、経年劣化も含めて、市街整備も弱いですし、そういう意味では、室内空間を使うのは適切かと思えますよ。それから、色んなディテールに、挽物の技術を活かした物を使っていけば方がいいですよ。それはいいバランスがとれるかと思えますよ。

(水野委員長) そうですね。九谷とって九谷そのものではないし、色彩ですね。山中漆器っていったら挽物ですよ。挽物って言ったときに、どういうものがあり得るか。すると、経済支援ってかなりありますからね。それをどう作って、使っていくのかってところにもっていくと、少し挽物文化ってのは出てくるのかもしれないですね。

(古場田委員) 古九谷のいいところと、木製のいいところ、絡み合いをどうしていくのか。

(長谷川委員) どんなところに使われるかによりますけど、木製品であれば、手すりはずべて木製になるということ。そういう使われ方も十分可能性があると思えますし。

(西出委員) わたしが発言していいのか、ちょっと心配なんですけど。

(水野委員長) いや、いいですよ。

(西出委員) ちょっと確認させていただきたいんですけど、都市施設っていうのをもっとしっかりと、どこに配置するのかっていうのを、ものすごくデザイン作るときに大切な事なんです。これを抜きにして考えられないのかなという気がします。ちょっと説明の中で曖昧にされている部分も、ちょっとある様な気がして、これをしっかりおさえながら、やってかないと。ちょっとそれぞれの思いでボタンのかけ違いが出そうな気がしますね。これをちゃんとしてほしいなと思えます。

もうひとつは、非常に難しいなと思っているのは、非日常と安らぎっていうのは、ある意味で相反している気がしますね。これをどうデザインに表現するのかっていうのを、非

常に厄介だなと。

まあ、プロの人にとっては、もしかすると大したことじゃないのかもしれないけど。私にとっては、非日常の華やか、あるいは、例えばさっき先生がおっしゃっていた、全部が緑でバーッと敷きつめてしまうとかってというのが、それに安らぎがどう感じられるのかってという話にするとか。

さっきの色を、3つの色に全部もう統一しちゃたりすると、それが安らぎと、どう考えるのかってというのが、デザインのひとつひとつは、魅力的なんだろうけども、難しいなという気がしますけども。それがないと逆に、他の駅とあまり変わらなくなってしまうような気もしますんで。そこをしっかりとおさえていかなってという気がしますね。

(水野委員長) 加賀温泉に来られた方っていうのは、基本的に安らぎがあるでしょうね。

(西出委員) そこが一番難しいんです。安らぎだったら、多分どこでもあるかもしれない。温泉ってところでいえば。

(水野委員長) プラス、やはり加賀温泉の差をつける、らしさだったりとか。

(西出委員) そうなんです。

(水野委員長) だからそのときに、まあ山代なんかでいうと、かぶくっていい方をしして。

(西出委員) 先生がおっしゃっている、そのかぶくってというのは、実は一番、今度の表現の中では最高の言葉になるんじゃないかなって。特に、石川県、かぶくってというのはある意味で、金沢に近いものがあるんです。前田家としてはあるのかもしれないですけど。かぶくってというのは非常におもしろい言葉だなって。これを全面的に出すっていうのは、石川県なり、加賀市にとっては、非常におもしろい言葉だなっていう気がしますね。

(水野委員長) キーワードになる様な。

(西出委員) それが非常におもしろい気がしますね。

(長谷川委員) だからね、加賀温泉駅でいうと、大きくない、小さい、コンパクト。だからおもしろい駅が出来そうな気がするんですね。どこにでもある様な駅にはしたくない。その辺のアイデアがちょっと考えていけないなと思いますけれども。

駅に着いたときのお客さんの顔とかね、帰って行く顔が全然違いますよ。面白いくらいですよ。駅行って、生で見とると。もう本当に帰りの顔はね、満足しきった顔。もうひとつは疲れきった顔して。おもしろい顔。よう遊んだなっていうね。

(水野委員長) 私なんか温泉へ行くと、日頃の疲れを休めてなんていうけど、疲れて帰って。

(長谷川委員) 美術館のホールのベンチに座って疲れきった人もいるし、かと思えばまだ「足りない」ようなキラキラな目をして、入場券払って、学習していく人と二通りありますよね。最近結構、加賀の芸術っていうか、文化を知りたい、そういう人が多いです。美術館に入ってくる人を見とると。

(水野委員長) 最近、私、JRで加賀温泉駅をよく見るようになったんですけど、女性客がものすごく増えていますよね。

(師池委員) そうですよ。本当に。山代も女子大生だらけですね。

(水野委員長) あはは。

(師池委員) どこかと思うほど、どこの都会かと思うぐらい。私も色々、皆さんの意見す

ばらしいなと思って聞いていたんですけど。ここの駅に求めるものっていうか。皆さん、都会からくるお客さんが、その土地に求めるものって何かになって考えたときに、田舎だと思うんですよ。しかもちょっと洗練された田舎。本当の山奥じゃなくてっていう感じの気持ちが強くて、その九谷の五彩よりも、たしかに、九谷の素朴さとか、そういうものの方が求められているんじゃないかなって。私たちがすごい素敵な都会のものと、同じ様なものを影響しても、求めているものは、違うと思うんですけど。

そう思った時に、例えば、器とかだったら、いつかそのお店の中でやるかもしれない、売店の方で、こちらの方にしかない、田舎の草餅を出して、そこで漆器とか、器とか、ここで皿の提供ができます。それで感じてもらうっていうこともできるし、すごく素朴感を残して欲しいかなって思うんですね。

もう加賀市の方は、すごく何か都会だと勘違いしているかもしれないけど、それは都会から来たお客さんが、派手にしているからに過ぎなくて。

私はもともと山代温泉なんですけれども、山代温泉の旅館の人たちとか、旅館の出入利用者はみんな派手なんです。感化されちゃっているんですよ、お客さんに。みんなお客さんいい格好して、駅に降り立って、旅館に入ってっていうのに感化されて、ちょっと派手なところあるけど。実際、お客様は何を求めているかっていうと、やっぱり美味しいものを求めていて、田舎を求めていて、あらこんな芸術があるのって、素敵ねっていう感じのものでいいんじゃないかなって思うんで。そこをブレなくしていただきたいなっていうのがもの凄くあるんですけど。

歴史はもちろんあります。でも、どこの地区でも歴史はあります。自慢したいのは加賀市もあります。けれども、他の地域でも自慢したいところはいっぱいあります。

で、絞らなきゃいけないっていうときに、他のもので補えることは。違うところで、売店でできる。例えば、駅舎の中で、その加賀市のスペースのところで出来る、じゃあショーケースに入れて。例えば、いっぱい加賀市においでる作家さんたち、九谷もそうですし、木地もそうですし、漆器もそうですっていう人に、貸しスペースを作って、そこで、ちょっと献上してもらうという事も可能かなと思うんですけども。

そういうことで、こっちにはそういう伝統技術がある、工芸があるっていうことをアピールする事もできるので、あまり華美にならないように、でもほっとする。けど、何かすごく面白くないっていうくらいの、興味を引くっていうところで、ちょっと品よく、田舎だけど、品のいい田舎で、純朴でプライドもあります、って感じを出してもらえるといいかなと思いました。

(水野委員長) そういう意味では、熱海とか、伊香保とか、ああいう所とは違って、奥座敷といわれている様な、ちょっと秘境っぽい所の、山中とかそういうのありますしね。関東の人には馴染みがないってところを、だんだん関東の人にも面白い所だなと思ってくれたらいいと思うんですけどね。それをどういうコンセプトで引き出したらいいかですね。

(師池委員) 金沢に対抗することはないと思うんですよ。金沢にはない所を、逆に出すっていう方が。

(水野委員長) 金沢には、加賀五彩とか、友禅の五彩と、そういう何か色んなものを混ぜて、バーンッとされている。

(師池委員) 華やかですから。

(水野委員長) だから、県都ですから、石川県全体の工芸を表現すればいいけど。加賀の場合は、加賀に特化して表現した方がいいですね。

(師池委員) だから、そういうスペースなんかを、埋め込みでもいいんで、界限いっぱいかかったところに、色んな工芸品が置けたら。そういうのも見れて、売店でちょっと田舎くさい物を食べた時の入れ物が、素敵な九谷の物を使っていたり、ちょっとしたお椀とかも、やっぱり山中漆器でも木地のものを。

それっていうのも、私たちはこういうのを普段使っていますよって感的な感じで、こういう所なんです。そして、食べ物も特別な、これがすごいんだってことは言えないですけど、私たちは平均的にみんな美味しいものを食べていますという事を、アピールできる場所があると、すごく、それはそれでリピーターが増えたりだとか、こちらの方はちょっと面白いぞ、ってことになると思うんですけど。北前船とかも。

(水野委員長) 味の方も、まあ、だいたい加賀温泉は蟹とか、海のもの、それから山の幸と、両方売り込んでいるから。ある程度、歴史・文化っていてもいいかもしれないですね。それから自然が入っている。この加賀の自然にとって、自然が入っている意味もですね、歴史だけだとちょっとつまらないので、歴史・文化とか。

(師池委員) 工芸文化も。

(水野委員長) うん、含めてね。

(師池委員) 前田家と縁があるって事をいったら、いやらしいですか。

(水野委員長) それは歴史にしといた方がいいんじゃないかなと。

(師池委員) いいですか。はい。

(水野委員長) と思うけど。ただただ、高岡もあれだけ言いたいんですよね。だから、むしろこれからは、高岡、金沢、山代が前田家っていうテーマで、ひとつにする、もうちょっと大きなストーリーをつくる必要があると思うんですよね。

高橋さん、先ほど西出さんの方から都市施設について、少し整理した方がいいと言われたんですけど、これ、先ほどJRさんの会社もそうですけど、まだ何がどう入るか、ちょっとプランニングができてないので、何が外にでてくるのか分からないから、ちょっとまだ不確定な部分があるんですよね。

(高橋委員) はい、そうです。

(水野委員長) だから、都市計画としてみた場合は、あの黄色い範囲だと、都市計画じゃなくても、車をどう回すかっていう、A案、B案の話しかないと思うんだから。あまり、都市計画上のテーマがでてこないですね。都市施設としてね。

(高橋委員) そうですね。なかなか、前回まである程度の駐車場の話とか、そこら辺の話が、皆さんご意見されたと思うんで、それも絡めて。今日はデザインの話になっていくのかなと思いますけども。

都市施設の中でも、高次施設っていうところの中で、こういう風なアミューズメントの部分、最近よく作って、一体的にやっているところもありますけど。今この通り、小松駅とかも平成18年、一度作り直したけども、今回また改装する形で。それはやっぱり時代、時代に合せた、リニューアルというか。そこら辺の所は当然出てくるのかなという風に思います。細かい事を言えば、先ほど言いました、トイレとか、そういうものとか出てくるとは思いますが。

で、駐車場とかそこら辺のところは、今回はとりあえず既存のものって形で。この前、ご提案があった通り、それをいっぺんに外に出したらどうかっていう様な話もあったんで、そうするとまた今度、スペースがちょっと変わってくるので、そうすると大屋根ですとか、こういう風なものが広く作ってってことで逆に狭くなるかもしれませんけども。それをとりこんだ形で、もう少し融通が利くような形にはなってくるかなっていう気はするので。

やっぱりこれ、まあ出来れば、駅舎とこの都市施設と、その辺の駐車場とかを含めた、何かこの、委員会みたいな何かそういうもので、ある程度統一して、出来るか出来ないかは別として。統一的に色々ご意見を機構さんなり、市の方なり、そこに投げかけていくっていう。そういう事も続けるって事が今後重要っていうか、必要になっていくのかなという気がします。

逆にまず、このデザインとか、色々話もありましたけど。それが出来れば。同じに機構さんも、早めにできるかと思うんですけども。していただいて、他の支援でやる場所。もしかしたら、民間でやっていただくところ。一番最初に議論がありました平和堂さんとかもあったと思うんですけど、その辺のところを出来るだけ統一というか、出来るだけ連携した形で、今後話をですね。進めるような形で、ところをしていただいて。

(水野委員長) それ次は、来年度以降、つめていく。プロセスの中で、ひとつの場を作って、それでしっかりつめていくっていうご提案なんですけど。

(事務局) 今3月議会で、本当にたくさんの議員さんから、たくさんの加賀温泉駅舎含めた加賀温泉駅の、質問がございました。逆にいうと集中的に質問されたという状況でございます。これはひとえに、やはり、議員さんの背景にはやっぱり、市民の方、商工会みたいな、そういう方々の、やっぱり期待と関心度の高さ、そういうものが、すごく、加賀市大丈夫だ、もっとやれっていう様なエールも含めて、思いがあって、そういう質問になったと思うんです。

平成28年度、基本計画の半部分も作るっていいです。そういう様な形でいかに、皆さん市民の方に、そういう過程を、プロセスを含めて、意見を言えるようなものを。何とかHPのファブリックコメントだけじゃなくて、そういうものを含めて、皆で作り上げたっていう様な、加賀温泉駅という風に思っただけでないかなってことで。

体制も4月から、ちょっと新幹線の人が増えまして、体制強化もしましたので。今後、そういう様なものも含めて、色んな意味で、情報発信をやっていかなきゃいけないという風に考えております。その、一番最初のお題目みたいな、コンセプトですから、今回、五七五七七じゃないですけど、言葉として、この委員会で決定していただきたいなっていうことで考えておりますんで。

(水野委員長) まだ色々議論しながら。それから、ちょっと難しいのが、仮設の時期が、数年、何年くらいなんですかね。

(事務局) いやもう、今年の夏からですから、約7年尺くらいですかね。

(水野委員長) そういうのも含めて、その7年尺の間に、やっぱりやって。市民全体が何か参加する様な形で、駅が出来上がると。金沢駅も上越妙高駅もそれで出来上がっているんですね、だから1周年にバーアッと来てってのと。

(事務局) 逆に短いんですよ。それぞれの駅が、もっともっと時間かけてやっていますよね。

(水野委員長) 時間かけてやっていますよね。

(事務局) そうですよ、はい。

(水野委員長) 前から、この委員会で最初からいっていますけど、まちづくり、一緒になっていくと良かったんですけど、黄色の範囲で考えていく。黄色の範囲だけでも結論を出していった。逆にこれから広げていって、市全体の力になる様にしていけばいいかなと思います。

(高橋委員) この前言われたんですけども、能美市の方で、ご存じの通り、能美根上、旧寺井ですけれども。改装が1年前に出来上がりましたが。ただ、出来上がったって所に、皆さん行かれたか、行かれてないかちょっとあれなんですけども、駅だけ綺麗になったんですよ。で、周りあんまり変わってなくてですね。で、皆のイメージとしたら、一回綺麗になったからこれで良かった、良かった、これで周りも少し賑やかになるんじゃないかと考えてから、全然変わらないと。能美市としてちょっとあれですけども。

ていうので、これはちょっと、逆にまずいってということで、地元の方とかが、融資を求めて、やっぱり何かしなきゃいけないんじゃないかって、活性化をしようという事で。たぶん、今月か先月かな、駅活クラブっていうのを作って、地元の町内会とかそこら辺が中心となって、色々なまちづくりを始めている。基本的にはソフトの話になるかと思うんですけど。そういうことになると思うんで。

今回はあくまで、新幹線駅を作るのがひとつの目安ですけども、当然、終わってからでも、たぶん、それなりのものを続けていかなければならないのかなと。勿論その、キックオフとなる様なものもまた。今回は黄色の範囲ってテーマがありますけども、それだけじゃなくて、その後も続けられるように。色々、今後の活動っていうのものが続けられる方が、できればなど。出来たときに、しばらくしてあれっていうのもなかなかね。皆さん結構、おる方が、最近ちょっとパターンがあったりとかしたもんですから。

やはり、こういうふうな、踏み出した、自主的にそういうものが、もし生まれれば、その方も上手い具合に取り込んでいただければいいのかなと思うんですけど。一応そんなもんです。

(水野委員長) 私も、例えば、この駅が加賀市の中で1番、バス路線が集まる所になると思うんですよ。考えると。そうすると、公共交通で、一番のポイントはどこだっていうと、ここなんですよ。そうするとここに図書館が欲しいとかね、ここにもっと高齢者の何かが欲しいとかね、そういうのが出てくるはずなんですよ。そういうまちづくりが出来てくると、駅と一体化なって、交通網も良くなるし。色々、上手く動き出す。そんな仕掛けがやっぱり出来るべきですよ。そうしないと駅だけがっていう。

(高橋委員) そうですね。

(水野委員長) 駅前広場だけ綺麗になったという話になっちゃう。そうじゃないんですよ。

(高橋委員) そういう仕掛けがたしかに、今後必要になってくるかもしれないですね。

(古場田委員) あとは、ガーデンシティに関してのなんですけども、資料の15頁ですか、こういう様な仮に描かれているんですけど。実は、この付近から観光客の方が見る機会は、まずないんですよ。絵としては表現しやすいんだけど。こっちの端っこ、この先って何にもないんですよ、もうここで終わっちゃっているんで。という事は、あまり現実的

な見え方じゃないんですね。そうなると、見た目の空間なのかなと、よく分からないけど、適当に植栽をぼんぼんぼんとあっても、これでじゃあガーデンシティっていうかって。何かどこにでもある駅の、駅前広場の空間なような。

で、何かこういう事をやるよりは、どうせお天気の悪い所なんで、一番南側の所までズーっと低い屋根で連続させて、大きな日差しというか、屋根をつけてやって、その下に、何かこんな大きな植栽じゃなくていいので、箱庭とかね。盆栽的な空間もいいと思うんですけども。そんなものが広がって行って、で、その空間を少し高い位置から見下ろせて、お茶を飲んだりだとか、そんな空間をあったらいいんじゃないでしょうか。ちょっと例として、適切かどうか分かんないですけど。大宮の盆栽美術館っていうのをご存じでしょうか。盆栽ばっかりな美術館。

(水野委員長) 知らないですね。

(古場田委員) そこはとても素敵な盆栽をおいた美術館なんですけど。それ中2階になつとったら、お団子とかお茶をいただけて、見えるんですけど。とてもいい和風な空間で。僕は割と好きなんですけど。何かそんな空間でもいいのかもしれないですね。それでもガーデンっていうのは、表現出来るのかなという気もいたします。大きな植栽を入れればいってものでもないと思うんですけど。

(水野委員長) そうですね。どういう風に作るかですけど。この広場は、こっちから見る必要はないんじゃないかっていうのがありますけど。観光客から見ると、会社の送迎バスに乗り換えたり、タクシーに乗ったりする、その空間がこの空間じゃないとおかしいですよ。

(古場田委員) そうですね。今回は。

(水野委員長) その為の駅ですから。だから、この空間を利用した、観光バスや何かに乗りやすい。あるいは、待っている時間が、そこに並んどってもいてもいいとかね。集合時間とか、会社の時間とか色々あるでしょうから、それも含めて何か自由になれる空間としてつくってあげるっていうのは出来ないですかね。

(古場田委員) 待ち時間も多いで、ベンチがたくさん置くとかね。そういうのは難しいのかなって思うんですけど。

(水野委員長) 金沢駅のもてなしドームの水門とか、観光客だらけですよ。観光客のための空間になっちゃうんですよ。あんな風にして何か作ったら、ここがそういう空間になったら使いやすい、っていうことが出てくるんですよ。それはどういう風な建築がいいのか、分かりませんが。まだ色々案が出てくると思うんです。ただそういう、今の段階ではリアルな建築な話じゃなくて、コンセプトの話でいえば、そういう待合の空間を作って欲しいってことですね。

私が知っているのであれば、ニューヨークのど真ん中にIBMっていうコンピューター企業があるんですね。あれが本社なんです。その本社のビルが建っているんですけど。ビルの足下に2階建ての温室があるんですよ。その中に誰でも入れて、竹林が、その間にベンチがあって、ニューヨーク市民がそこで休んでいるんですよ。観光客もそこで休んでいる。当然IBMも使っているんだけど。ああ、IBMの大きさだなんて思ってね、関心するんです。ニューヨーク行くと必ず行くんですけど。それはガラスのあれでニューヨークの摩天楼もワーッと見えるし、横見ると自動車がワーッと動いているし、何かそういう。

ニューヨークでいえば、「ハイライン」って出来たんですよ。古い線路じきが空中にある線路を庭園化したんですね。ニューヨークのハイラインガーデンって行ってですね、ダーってすごいですね。やっぱり鉄道系とガーデンが一緒になっている。何かそういう意味で、ガーデンとして何か出来る場合に、普通のガーデンと違う、加賀の温泉駅前のガーデンって何だろうって考える、そういうチャンスでこれだってものを作りたいですね。

(長谷川委員) 私、前々から、構想を練って、市の方にもお願いしたり、駅の方にも行ってお願いしとったのは、駅出て、美術館までのアプローチ、これが全然生きてないっていうのね。せっかくあそこに美術館があるのに対して、施設がきてもいいわけです。このガーデンの中に、やっぱり現代彫刻があつたらいい。彫刻がないとね。彫刻があると活きますですよ。その中に焼き物でもいいわけですよ。

(水野委員長) 古九谷風の。

(長谷川委員) そういうものを点在させる。やっぱりアートを意識した、そういう様なガーデンを作りたいなと思うんですよ。それは、今周辺の駅のどこにもないです。ひとつの魅力になるのではないかなと思うんですけど。

例えば、今ね、改めて、彫刻を求めんでも、市役所の中にいっぱい彫刻が遊んでいるんですよ。暗いところに、お化けみたいになつとる。勿体無いのにも関わらず。教育委員会に行つて、あれを運んで持ってきて、美術館の前に持ってくれつてどれだけゆつても、予算がないとか色々。それと一緒に眠つとるんですよ、いっぱい。そういうものをここへ持ってくる。中央公園にも眠つていますよ。いい作品にも関わらず。誰も行かんもん。今ここへ、持ってきたらいいですよ。そういうね、文化・美術、そして、ガーデンにする、っていうのもひとつだと思いますよ。

(西出委員) 少し反対みたいなお話をしてもいいですか。加賀市って駅に色んなものを集約する必要があるのかどうか。いっぱいありますよね、町。そこには素晴らしいものが全部あるんですよ。そこに、行つていただくのが本当は大切なんじゃないんですか。

(水野委員長) そうですね。

(西出委員) そうしたときに、駅にそんなにいっぱい、あれもこれも、集約する必要は、もしくはなくつて、そっちに出かけて下さいよつて形の方がいいんじゃないのかつていう風には思うんです。だから、変にそこにガーデンシティとして、そこに、もしかして偽物だと思つてもいいですよ。他、町の中にガーデンシティが作られてないですよ。そこだけ作つても変ですよ。そういう連携があるんならいいですよ。でも、そういう様なものがまったくなくて、そこだけにそういう風なものを作つて、本当にいいんだらうかと。そういった事も、もう少しちゃんと考える必要があるんじゃないかなつていう気はしますね。

(水野委員長) たぶん、古九谷の話だったら、この駅前広場行つたら、あ、ここの町は古九谷の町なんだつて分かつたら、九谷美術館へどうぞつてつてそういう形ですよ。

(西出委員) そうそう。そうです。

(水野委員長) で、挽物だったら、挽物はちょっと遠いなつていって、でも行けるかなつていう。何かそういう、誘い水みたいなものであつて、そのものをここで全部見せるつてほとんど不可能ですよ。

(西出委員) そうですね。

(水野委員長) だから、なんかこう、アンテナショップじゃないけど、希望として発信する。

(西出委員) まず駅へ降りたら、なるほどっと。この町はっていう、そういうものを分らせる為に、ここに置くのであって、専門的にそこへ行きかけたならこれは、九谷美術館へ行く。九谷の文句を言ってゆって九谷焼発祥の地へ行く。そういうものにアプローチして行けるようにしてあげるのが親切。こんな所で全部できるはずがない。ですから、導入段階ですよ。町を知る為の。

(古場田委員) 期待感とかわくわく感がないとね。

(西出委員) というものにしないと駄目ですね。

(古場田委員) 小さいですよ。スペースが。大きくはないですよ。小さいスペースの中でもどれだけ、それを。

(西出委員) それもコンセプトとして。

(水野委員長) だから、あの、金沢駅の場合、ここに閉じ込めたんですよ。わざと。

(西出委員) ええ。

(水野委員長) あれは出しちゃうと駄目だから。覗き見させてみるとかね。ああ凄いなって、ああ細かいところまで凄いなって思わせる為に小さくしちゃって。だから見せ方もあれですよ、いろいろありますよね。

逆にいうと、加賀市全域の大きなストックを、知らしめる。そういう観光案内所だとか、あるいは新しい情報機器っていうのは必要でしょうね。

(水野委員長) まあ普通は、下の段の文書でいえば、「加賀の自然と歴史・文化を見せる駅」。育んだ地域力っていうのを省いても通じる。育んだ地域力っていうところが、何となくこだわりみたいなのを感じる。

(高橋委員) 地域力っていうのは、注釈に温泉・工芸・食・祭りなどの文化を示すと書いてあるけど、文化でいいような気がする。その方が分かりやすい。地域力と書くとわざわざ解説が必要になってくるので。育んだ文化を見せる駅とか。何かそんな感じでもいいのかもしれないですね。

(水野委員長) そうしましょうか。「加賀の自然と歴史・文化を見せる駅」。で、下の4つの副題になりますけど。

(師池委員) 最後のホームからの山並み眺望や広場の緑を感じられるイメージってこれイメージ、見たままですよ。イメージ。なんか不思議な様な。

(水野委員長) これはあんまりいい眺望じゃないですよ。加賀温泉駅からの眺望はたいした景観でないと思う。だからこれは必要無いんじゃないでしょうか。むしろその医療センターの方が目立つ。新黒部の場合は、間近に山並みが見える。だからこの副題の方は、さっきのほっとする安らぎとか、かぶくの味わいとか、そういったものを感じる、という方がいいんじゃないでしょうか。もう一つは、具体的に、特に、古九谷や山中挽物を活かした、とかね。この同じメインタイトルとサブタイトルがちょっと違う方がいいと思うんですね。これメインタイトルとサブタイトルがちょっと似たような、親戚みたいな感じで書いてあるので、同じ事を繰り返しているから。そうじゃなくて、その、ほっとする安らぎとか、かぶく味わいとか、そういう方の感性の話の方が。だから具体的には古九谷とか挽物とか、あるいは、もてなしの心とか、そういう方がいいんじゃないでしょうか。あと、

さっきも言った前田家文化っていうのをどうするか。

(古場田委員) それは何か、いろんなディテールで表現できる様な気もしますがね。ちょっと気になったのが、細かい所で申し訳ないんですけど、地場産材の木の地場の地場産の木地って、杉をいっぱい使うって、建築みたいになっちゃうんで。ただ、地場産材の木地っていうのは省いた方がいいかなと思います。それから九谷五彩って先ほど申し上げましたけど、これは古九谷の色の方がより使われやすいと思います

(水野委員長) メインタイトルを『加賀の自然と歴史・文化を見せる駅』にして、サブとして、具体的に古九谷、それから挽物、もてなし、(が感じる)、を見せるべく、あとは感じるって意味で、温泉に来るお客さんっていう意味で、ほっとする安らぎや、粋なかぶく味わいを感じるという。

それで、私はその心を持って駅舎のデザイン、運輸機構さんたちと一緒に頑張って、考えていって、それから国交省やなんかも含めて、人が集まる中心部をどうつくるか、そこを考えていく。それから、駅前広場、交通の結節点として新幹線から来て、車交通に乗り換える。その結節点、車交通において新幹線乗るまでの結節点。駅前広場のその機能をどうするか。そのコンセプトの中に入るとおもうので。それからガーデンが抜けていますね。

(古場田委員) ガーデンってちょっと引かかる言葉のような。なんか庭園くらいの方が相応しいのかなという気がしますね。

(西出委員) ガーデンシティ構想っていうのは、まあ言われたんですけど、加賀市自体がまだガーデンシティとしての位置として、ちゃんと出してる訳じゃないですよ。いわゆる具体的な話として。だから、今後そういう風にもっていきますという、未来図をそこに造るとして、設けるっていうのであればいいですよ。

(水野委員長) この時期に駅というものを起点にして、それを起爆剤として。

(西出委員) そうです。そういう風な言葉にしてあげればいいんですけどね。

(水野委員長) ただ、雄大な自然は、加賀市全体でやればいいんですけど、ここではどういう風に造るか。先ほども話が出たが、盆栽をミニチュアでつくるとか。

(師池委員) 先ほど言われた竹稻で、ベンチが出来るのって素敵ですね。

(水野委員長) 素敵ですよ。

(師池委員) 実用的なものでもあって欲しいかなと思うんですけど。ベンチを見て、観光客が待っている時に座れて、とても実用的な空間という方が、お客様にとって、ちゃんとしとると思うので、大切にしていきたいと思います。

(水野委員長) 竹林の場合、非常にオシャレな感じがするんですよ。

(事務局) 出来れば平和堂の外観も竹林にしてもらえれば。そうするとパツとする。

(水野委員長) そういう風に、なんかイメージが広がっていくといいですね。じゃあひとつ、加賀市が目指す庭園都市の一翼を担うと入れときますか。副題でね。

一翼を担うって、先導するっていうとまたちょっとおこがましいからね。結果がでるなら先導するでいいんだろうけど。副題をそういうふうにして、ちょっと主題と、違う内容で、そうすると面白いかもしれないですね。そうすると、色んな人が色んな考え方で。具体的な話は次年度するという事。

(西出委員) 最後に、資料の19頁の、この委員会がこれからもっとしっかりと、伝えてほしいですね。どういうふうにかこの委員会が進んでいくのか。

(事務局) 本委員会の関わり方で、来年度以降ですけども。来年度、基本計画っていうことで、あくまで基本ですので、詳細な計画までは至らないんですけども。基本計画の中で必要な機能。それから、規模等を、はっきり明確化しまして、その中でも具体的なアイデア等は、この時期で盛り込みたいと思っておりますので。関係団体、それから委員の皆さんからも、ある程度意見をいただく場を設けないといけないとあります。

ですので、28年度は、今年度みたいに4回、集まっていたくってという事はないとは思いますが、最低でも1回、2回。集まっていたくって、審議いただく場をつくらさせていただきます。ご意見を拝借する場をいただきたいと思っております。

で、29年度以降は、また具体的なデザイン案が出てくる時点でも、またその時点でも、皆さんのご意見をいただきたいと思っておりますので、そのような委員会ってことで考えております。

(西出委員) それ以降もずっとこの委員会の設置は、期待されているんですか。

(事務局) 駅舎のデザインが決まって、あと都市施設の。駅前広場のある程度の。

(西出委員) 施設も含めた設計がほしい出来て、そんでほしいやっばり。

(事務局) はい。そうですね。

(水野委員長) このコンセプトの中には、加賀市民に対して、語りかけて、反応いただき、ご提案いただく機会が必要でしょうね。金沢駅の場合も、3つの案を作って、市民投票したりしましたし。上越妙高駅の場合は、この案はどうだろうかというので、市民集会を開いたら、子供たちからいっぱい案が出てきたんですよ。小中学生呼んだら、もう色々でてきて、大変だったんですよ。そんな風にして盛り上がっていくこともあるし、何かそれをひとつでもふたつでも採り入れてあげていきたい。採り入れてあげれば。それで、皆の力を何とかして持っていけるように。

是非、協力していただいて、投資していただくとかね。やっぱり駅周辺に楽しみがないと。行政に対しておんぶにだっこですから。それだと大変ですから。

あと、JRさん、オブザーバーの方、何かこの機会にございましたら。我々このコンセプトをご提案することになると思われますから。

(四十九町オブザーバー) 前回事務局の方から、今回の委員会をうけて、6月ぐらいに市長さんの方から直接、コンセプトいただくって聞いておりますので、出来るだけそのコンセプトをいただいてから、色々話をさせていただいて、いいものを皆様に提案できればという風に思っておりますので、今後ともご協力お願いいたします。

(水野委員長) こちらこそ宜しくお願いいたします。

(四十九町オブザーバー) 私共も一応、機構さんから、ご提案いただいたものにつきましてですね。今後、皆様が使いやすい、それから我々が業務としてやりやすい駅作りを作っておりますし。あとコンコース、ラッチ外ですね、そこにつきまして、あるいは高架下につきましては、今後皆さんにどういう風に、より良いものをつくっていくかというのは、我々も専門として頑張りますので、しっかり打合せさせていただきたいと思っております。

(水野委員長) 具体的に例えば、駐輪場はどうしても高架下を使いたいとか、色んなことがこれからありますんで。

(四十九ワザバー) それは、これから色々協議の場で、ですね。調整していければいいかなど。

(水野委員長) そうですね。いいチームワークでお願いしていける様になったらいいなと思います。宜しくお願いします。

4回も議論しながら、ここまできましたが、いかがだったでしょうか。この辺で着地してよろしゅうございますか。だいたい、細かいものにつきまして、私の方で最後にチェックさせていただいて、それで今回の結論としたいと思います。宜しくお願いします。

(事務局) それでは、4回に亘りまして、2年度、委員会色々と検討いただきまして有難うございました。最初は色んな情報網、少ない中で、委員会がスタートしまして、追加で我々が調査して、現状を把握したり、選定条件っていうものを整理したりしながら、やってきました。その間で、皆さん方も、大変色んな事で、実際できる所とできない所の認識も、さらに夢が広がる部分も、あったかと思えます。

計画はまだ、今からです。来年度、さらに具体的な案に入っていきます。機構さんとJRさんと協議していきますし。それから現在、おっしゃった様に、駅なので色々な利用者、交通結節点という事なので、利用者が多岐にわたっておりますので、そういう方々の話も、これから進めていきたいと思えます。

何より市民全体を、巻き込む様にして、情報提供しながら、計画をまとめていきたいと思えますので、今後とも委員の皆さまには、ご指導ご協力をお願いしたいと思えます。委員会どうもお疲れ様でした。有難うございました。